

枕詞私見 その二

—— 平安時代の枕詞 ——

滝 沢 貞 夫

(国語科)

序

賀茂真淵は「冠辞考」で、歌全体の文意とは直接に意味的連関がなく（意味の非実質性）、五言一句、被枕詞との接続関係が特殊で固定しており言いならわされた言葉（社会性・固定性）、古語であり形式的に伝承されてきたものとする（古語性）の四つの条件に叶う歌詞を枕詞と定義している。古代研究の一環として万葉中心に形成された真淵のこの枕詞観は、江戸時代の国学者ばかりでなく、何ゆえか無条件で明治以降の国文学者にも受け継がれた。この結果、歌人の個性創造性が全く認められないと見なされた枕詞は、近代の文学研究の立場から「一切の慣用語を捨てて、使わないうところから出発したいと思う」（文章読本）野間宏、そこまで徹底しなくとも価値の低い第二義的な特殊な歌詞として無視されてしまったのは当然の成り行きであった。枕詞が研究対象として取り上げられるのは個性が問題とならない民俗学においてであり、古代の究明を目的としてその発生事情が論じられたに過ぎなかったのは、この間の事情を如実に物語っている。

沢瀉久孝博士は「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」（万葉の作品と時代）の中で、人麻呂が創作した枕詞七十余種を御指摘になられるが、これは暗に真淵のいう社会性・固定性・古語性なる枕詞観を批判されたものと解される。しかし今日でもこの真淵の定義は枕詞を理解する根本概念として遍く万人の支持を保っている。以上の枕詞観からすれば、平安時代の和歌に認められる枕詞は、万葉の場合よりもさらに価値の低い無用の長物以外の何物でもなくなってしまう。事実平安時代の枕詞について論究された先学は、管見の及ぶ限りでは十指にも満たない。けれども、もし真淵の枕詞観自体に対して、または万葉によって形成された概念を限度として平安時代の枕詞を律しようとする態度は、あまりにも形式的に過ぎるのではないかとの疑問を抱いた場合、一体平安時代の枕詞の実情はどのように把握されてくるのであろうか。

一

平安時代の枕詞の変遷を概観すると、四つの注目すべき時点の存在が想定されてくる。その第一は、いわゆる古今集の時代であり、この時期の枕詞が歌風の場合同様以後の八代集時代における枕詞の性格、重要度を決定付けたものとして注目される。「石上枕詞例」の著者は、「古今の頃に至りては古事記・日本紀・万葉集中に最多なる枕詞を十に九を捨て、足引の久方の、百敷の、たらちねの、うつせみの等雅びたるを纔に択り出でて、最も巧にも雅にも用ひなせるいよまぐはひなるを好まれたるなり」と説き、尾上八郎博士は、古今集に一四三の枕詞が認められるといい、その半数は梓弓をはるに、王簞を二見に続ける懸詞からくる類で、性質状態から

する「たらちねの母」反覆からする「白川のしらず」などがそれに次いで多い事からして、万葉時代の枕詞の趨勢は質の面では改まっていけないと言われ、枕詞の置かれる位置も第一句のものが五七%、第三句のものがこれに次ぐのであるが、四句、五句目に枕詞が置かれた例も見出される事から「前代と当代と、枕詞の意義を異にしたのは、枕詞をして接頭語に終らしめず、本義と必然的関係ある如く作為し、一枕詞に限り、他のものを以てしては、全然意義を失ふが如く接合することをして来た事である。」「枕詞も旧来のまゝを用ひるが、受辭の変化を来して、人の意表に出でようとしてゐる」(古今集の修辭)などの特徴をあげられた。福井久蔵博士もまた「枕詞の研究と積義」の中で同様の見解を示しておられる。これら先賢の御指摘はそれぞれ貴重で有難いのであるが、立論の基盤にはやはり万葉集の枕詞が本来の枕詞であり、古今集の枕詞はその残滓にすぎないとする意識が等しく認められる。枕詞が真の精彩を放ったのは万葉集までで、古今集以後はその形骸にすぎないとは、むしろ一般の常識でこれまで古今集の枕詞を正面から追求されたこれら先賢の研究もこの範囲を出てはいない。

しかし次のような事実がある。万葉集の枕詞の大半は長歌の内に存在し、短歌の中の用例は意外に少ないのである。古今集の数少ない長歌にも枕詞は豊富に用いられており、万葉集のそれと少しも変わっていない。要は古今集に長歌が少なく、すでに長歌の時代ではなかったという事情が、万葉集の枕詞と古今集のそれとの間に数値の上で相当の隔たりを感じさせる大きな理由となつていゝと思われる。万葉集の短歌にも枕詞が用いられている以上、この隔たりだけによつて枕詞自体の変化を説くことは当を得ないのではなからうか。さらに万葉歌人の中には柿本人麻呂・山上憶良・

大伴坂上郎女・山部赤人・笠金村・高橋虫麻呂・大伴家持・大伴池主・中臣宅守・田辺福麻呂など、枕詞を積極的に用いた者が何人か見出される。なにかんづく数多くの枕詞を創造し長歌中心にもっともよく使いこなしたのは柿本人麻呂である。そして人麻呂の枕詞を無条件で意図的に踏襲・模倣した家持の存在もまた注目される。この二人の短歌・長歌以外の万葉集の用例は、われわれが思っている程實際は多くないのである。今試みに沢瀉久孝・森本治吉博士著「作者別年代順万葉集」によつて、家持と防人(異質と思われるので)の作を除いた第四期の歌人の短歌から枕詞を摘出し、これを古今集の短歌と比較してみる。万葉四期は短歌数六二八、枕詞九七、百分比一五・四となるのに対し、古今集は短歌数一一〇六、枕詞一四六、百分比一三・二なる数値が求められる。このようにほとんど同程度の枕詞が古今集中にも存することが知られるのである。したがつて短歌の中で用いられる枕詞に限っていえば、万葉と古今とでは数量の上での差異は認め難い。それにもかかわらず一般に古今集の枕詞と万葉のそれとについて相違が云々される事情は一体どこにあるのであろうか。

次に問題となる時点は白井裕子氏(「枕詞の消長」国文目白第五号)によつて指摘された拾遺集と後拾遺集との間の断層である。真下和子氏(「三代集の枕詞」女子大文学国文篇第一六号)が三代集を「一まとまり」と見なし、て立論されたのも、おそらく拾遺集と後拾遺集の枕詞とは異なる事が前提となつたであらう。たしかに勅撰集に限つてみてゆけば、拾遺集までの枕詞と後拾遺集以後の枕詞とが数値において著しく相違している事は認められる。しかし勅撰集とは、その時代時代の記念碑的撰集事業なのであり、常にこれまでの先人の秀歌と当代歌人の作とが調和を以つて編纂される性

格のものである。拾遺集には人麻呂の歌一〇〇首を始め数多くの万葉歌の入集が認められるのに対し、後拾遺集にはこのような万葉歌は見られない。二つの集の枕詞の数量的変化の要因はこの点に多く求められるべきで、勅撰集の外形的傾向のみをもってその時代の枕詞の消長を論ずることは許されるべきではないであろう。しかしながら調査対象を私家集・私撰集・歌合その他に拵げてみると、古今集の撰者の場合と比べ以後漸次枕詞の使用が減少してることが知られる。そしてこの現象は、どの年代からというような明確な断層によるものではなく、むしろ歌人によって枕詞を数多く用いる者とはほとんど使わない者とが存するという作者の問題であり、勅撰集や古今六帖（万葉歌を除いても）、屏風歌・褻の歌に枕詞が多く、女流歌人・歌合の歌にはあまり使用されないという和歌の位相にかゝわる問題であるように思われる。このように数値が低下する傾向の中で、歌人・位相による変化が認められる点にこの時期の特色が見られる。

金葉集時代の歌界は、源俊賴・藤原基俊の出現により新旧兩派の対立の様相を呈し、新古今に連なる新風和歌の胎動期を迎える。この中にあって枕詞は一体新旧いずれの歌人によって支持され、どのような形で受け留められ使用されていたかという問題は、枕詞を単なる化石・万葉の形骸と見なさず、平安時代には平安時代なりに活用されていたと見るならば当然注意しなければならぬ点と思われる。特にこの期以降に万葉集によると思われる古い枕詞の復活も認められるなど、金葉集の時期を平安時代の枕詞の流れの中で第三に注目すべき時点のように思われる。

最後に問題とすべきは新古今時代である。この期の枕詞は定家・家隆ら御子左家流によって積極的に取り入れられ、新古今風の形成における重要

な修辭の一つと目されるに至ったらしいからである。現存の諸資料によってみると、枕詞は万葉集、古今集に次いで第三のピークをこの時点に迎えることが知られる。本稿では以上の点を問題とし、併せて平安時代全般を通しての枕詞を概観して行くこととしたい。

そこで本稿の前提となるのは何を枕詞と認めるかという定義である。「和歌文学大辞典」の「枕詞」の項には、高崎正秀博士が、

全体の文意とは直接に意味的連関がなく、単に主想の一部を表現に導くためにその詞句を修辭する詞であり、この点は序詞と同じであるが、枕詞は固定性・社会性があり、通常五音節一句からなるものである。一定の言葉に一定の枕詞を冠するのが本来の姿で、枕詞は被枕詞との関係において成立するものであるから、同一の詞句でもその使用法によっては枕詞とならないものがある。

とあり、意味の非実性をまずあげ、次ぎに序詞との相違として社会性、固定性を述べ、五音節一句からなる歌詞を枕詞と定義される。本稿で扱う枕詞は、意味の非実質性、五音節一句はこれを重視し、社会性、固定性はかならずしも拘泥しないこととした。その結果平安時代の枕詞を扱う場合は、万葉中心に形成された通常の枕詞の定義では律しきれない幾つかの問題点が見出された。そこで本稿で枕詞を扱って行く上で必要と思われる点についてさらに触れてみたい。

1、あしひきの、あらたまの、ちはやぶる、ぬば玉の、久方のなどの語義が不明な枕詞は、土橋寛博士が「古代歌謡論」の中で御指摘の如く、社会化、固定化されたもので、意味の非実質性の典型的なものとして、平安時代の和歌においても枕詞と認められる。

2、この時代に至ると、「夜をさむみくはつしもををらひつゝ草の枕にあまたたびぬ」(古今、躬恒、羈旅)のように、意味の実質性が認められ、しかも七音句に置かれた枕詞風の語群が多く見出される。特に草枕に対する「草の枕」は多くの歌人によって用いられた。中には、「しぐれつつ物ぞかなしき忘れ草枕にむすぶ岸のたびねは」嘉応二年一〇月二日散位敦頼住吉社歌合・堀川)のように句をまたいだ草枕も現われる。これらはいずれも草ノ枕という意味を有すると共に旅なる意味を持って用いられていると解される。旅なる意を持つ点には社会性・固定性に裏付けられた伝統的な約束が働いていると思われる、このような寓意の認められるところも語法的にみて枕詞的で、「草の枕」の類も当然枕詞と認めるべきであると思われる。しかし本稿の目的が通時的な枕詞の変遷を探ることにあるので、便宜的にこれらは除外した。

3、平安時代の枕詞の中には、「山川のおとにのみきくも、もしき、身をはやながら見るよしもがな」(古今、伊勢、雑下)の「もしき」の如く、本来被枕詞となる大宮の異名として枕詞が用いられる現象も数多く目に付く。このような異名としての用法は、草枕、王鉾、たらちね、久方、百敷、若草などに限られ、枕詞の一用法とも見られるが、意味の実質性の面で疑問があるので、本稿では枕詞から除外した。

4、土橋寛博士は前述の書で「枕詞の概念を形作る重要な属性として固定性、社会性ということ、意味の非実質性ということの二つをあげ」「意味の非実質性」ということは、枕詞の最低必要条件とすべきものであるが、その判定も必ずしも容易ではなく、従来枕詞の認定で異論のあるのは、多くこの点にかかわっている。」と述べておられるが、このような事は記紀、

万葉の場合だけではなく、平安時代の枕詞についても同様である。「白妙の」は万葉集にあっては意味の実質性を認めて枕詞としない注釈家が見られるが、特に平安時代の場合は特殊な例外を除くと全てが白という意味を明確に表わしている。そこで白妙のは枕詞とするよりはむしろ白色の雅びやかな歌語表現と見なした方がよいと思われる。「草枕」も既述の如く「草の枕」なる表現が数多く存するほか、「草ならぶ枕」(後京極殿自歌合)「草の原枕」(俊成卿女集)「草のたび枕」(千五百番歌合)と読んだ歌人が認められる一方、「草枕」から派生したものと思われる「磯枕」「岩枕」「浮き枕」「苔の枕」「こも枕」「さゝ枕」「すが枕」「袖枕」「旅枕」「つげ枕」「浪枕」「浪の枕」も使われている。以上の諸現象から「草枕」も草ヲ枕ニスル意味があったと推測される。しかし「白妙の」が唯単に白というのみであるのは対し、「草枕」には草ヲ枕ニスル意味の外、被枕詞に旅が固定していることと、草枕自身旅なる意をも併せ持っている点で、枕詞と見なしてよいものと思う。

5、初句に置かれた枕詞の場合は、「夕月夜おぐらの山に」「梓弓春たちしより」の如く、被枕詞の懸詞を誘発し、誘発された懸詞の意が全体の文意にかかわってゆく場合が最も多く、「花すすき我こそ下に思ひしかほにいでて人にむすばれにけり」(古今・仲平朝臣・七四八)の如く被枕詞が三句またはそれ以後に隔てられている場合、「唐衣きつつなれにしつましあればはるるきぬる旅をしぞ思ふ」(古今・業平朝臣・四一〇)「梓弓春たちしより年月のいるがごとくもおもゆるかな」(古今・躬恒・一二七)のように、初句の枕詞が縁語の中心語となって、一首全体の支柱となる用法が見出される。これらはいずれも枕詞のこの期の特徴的な用法と思われる

る。

6、三句に置かれた枕詞の場合は、「夕づくよおぼつかなきをたまくしげふたみの浦はあけてこそ見ぬ」(古今、藤原兼輔、四一七)の如く、初句・二句と内容的にかかわりが無く、四句以下の文意を誘発する浮紋のような詞句を典型とする。また「かも山やいくらの人をみづ垣の久しき世よりあはれかくらむ」(定家、拾遺愚草)の「みづ垣の」如く、枕詞自身が懸詞として働き、二句からは見ずの意で連らなる用法、縁語の中心語となる例、被枕詞が隔たっている例などが認められる。

7、以上の詞句を枕詞と認めた場合、「いく世しもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひだる」(古今、九三四)の第四句「あまのかるもに」も枕詞と同じ用法としなければならない。この外、「このめも——春」「ねを——たえて」のような四音句、二音句も枕詞と同じ用法である。ただし本稿では前述の目的からこれらを便宜的に除外した。

本稿でいう平安時代の枕詞とは、八代集の時代を大略指すこととし、具体的には万葉集中で確認し得る最終年時天平宝字三年の後から一応俊成卿女の没年と推定される建長四年までの約五百年間とする。対象とする枕詞はその間に成立した勅撰集(新勅撰集、続後撰集は除く)私撰集、私家集、百首歌、歌合、屏風歌、竟宴歌、賀歌などを始め、歌論書、物語、史書、日記の中に含まれた和歌で、翻刻されているものを可能の限り広く求めた。使用したテキストは、岩波古典文学大系、久曾昇博士著「三十六人集精撰」・桂宮本叢書、正統国歌大観、正統群書類従、萩谷朴氏著「平安朝歌合大成」・古典文庫・碧沖洞叢書・岩波文庫・朝日日本古典全書その他であり、具体的には、勅撰集の中、古今集、新古今集が岩波の古典文学大

系本、拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集が岩波文庫本・後撰集・千載集が八代集抄本を用いた。私家集は・和歌史研究会編「私家集伝本書目」によつて6の猿丸集から243俊成卿女集までとし、この中在原元方・藤原輔尹・花山院・大江嘉言・三条天皇・源道成・藤原頼宗・後三条院・白河院・堀河院中宮上總・藤原道経・近衛院・鳥羽院・藤原親隆・二条院・高倉院・藤原隆季・皇太后宮大進・祝部成仲・藤原宗家・西念法師・藤原実定・後白河院・藤原公衡・藤原親盛・源具信・法然・藤原有家・藤原実房・高弁・後堀河院・源家長・藤原忠信・道助法親王の三四人については資料の関係で調査できなかった。これを除いた諸家の集を対象とした。その他私撰集・歌合・百首歌などは、正統群書類従、平安朝歌合大成・桂宮本叢書・国歌大観を主に用いた。この結果調査の対象となった短歌数は大略一四万余首である。

二

すでに触れた如く、万葉四期の短歌(家持・防人歌を除く)と古今集の短歌の枕詞を比較した場合、数量において両者の間には世間で言う程の相違は認められない。しかし万葉集から古今集の成立までには約一五〇年の歳月が経過しており、この間にいわゆる国風暗黒時代が存在し、漢詩文の影響も加わつて歌風が大きく変貌した。この事が枕詞にいかん影響を及ぼしたかを詳らかにする為、古今集時代を通説に従つて読み人しらず時代、六歌仙時代、撰者時代と分け、一五〇年間の枕詞の変遷を具体的に追うことにしたい。この場合それぞれの時代に短歌を分類する方法として、読み人しらずの歌は全て便宜的に読み人しらず時代のものと見なし、安倍仲麻

呂らを加えた四六二首を一応それとし、六歌仙時代と撰者時代との境界を仁和と寛平の間、八八九年に置いて、作者を「古今和歌集目録」の記述等を参考にして分ける方法をとった。その結果六歌仙時代の作は一九二首、撰者時代の和歌は四四六首（ともに長歌は除く）であることが求められる。この分類によってそれぞれの時代の枕詞の状況を調べたものが次の表である。

時代区分	歌数	枕詞数	百分比 (枕詞数/歌数)
万葉四期	六二八	九七	一五・四
読み人しらず時代	四六二	六九	一四・九
六歌仙時代	一九二	一一	五・八
撰者時代	四四六	六六	一四・七

る。この結果によると六歌仙時代の枕詞の使用率が著しく低下していることが注目される。少ない歌数についての結果であるから、これを以って断定することは躊躇しなくてはならないが、一応万葉四期読み人しらず時代と差異のない程度に用いられていた枕詞が、六歌仙時代に半分以上に減少し再び撰者時代に読み人しらず時代と同程度に数多く使われるようになったとの見通しは立てられると思う。

この見通しに立って六歌仙時代の枕詞の状態を知るため、対象を後撰集・拾遺集および私家集・古今六帖などに見られる六歌仙歌人に拵けてみて

も、後撰集に対象歌数四〇首中、枕詞三、拾遺集は対象歌数一五に対しても、二と、撰者時代の歌人と比べてはるかに低い使用率であることが認められる。この傾向は私家集においても同様で、小町集は六八首中に枕詞が三（長歌一首は除く）、業平集は五八首中枕詞四、遍昭集三四首中枕詞三、敏行集二四首中三（以上西本願寺本、小町集は醍醐本による）であって、貫之集、躬恒集に認められる枕詞と比べるとやはり使用率が著しく低い。これらの結果も古今集で得られたものと同じであって、外形的特色からすれば、古今集の枕詞は、六歌仙時代に一時衰退し撰者時代に至って万葉四期の使用率と大差ない迄に復活したことが言い得るようになる。

このように一五〇年の間にも数値の点で大きな変化がうかがわれる枕詞であるが、内容の面でも万葉四期の短歌（家持、防人歌を除く）に認められる枕詞と古今集のそれとを比較すると、あしひきの、いそのかみ、たましくしげ、たまぼこの、ぬば玉の、久方のなど一二種類の枕詞は古今集に継承され、両集共見出されるが、あまざかる、あをによし、草枕、たまきはるなど万葉四期に認められる二九種類の枕詞は、古今集の中には見られなくなってくる。この結果から一見万葉四期の枕詞と古今集のそれとは相異なつた枕詞群のような印象を受けるが、この解釈は枕詞の社会性・固定性を過信したもののように思われる。何故ならば、文献に記載された枕詞についてみた場合、記紀歌謡、万葉集について同様に時代別にそれぞれの枕詞を比較してみると次表のような結果が得られる。（この事は別の機会に詳述したい）。そこで万葉四期と古今集との枕詞を比べた場合にも、当然予想される結果であり、むしろこのことから古今集時代の枕詞が依然として枯渇せず、生き続けていたと見ることができのではなからうか。

時代 枕詞数	記 紀 歌 謡	万 葉 一 期	万 葉 二 期	時代作者未詳	万 葉 三 期	万 葉 四 期
その時代に初出のもの	112	17	159	160	57	71
用例がその時代だけのもの	58	6	73	123	53	71
その内使用数が一つのもの	(46)	(3)	(61)	(102)	(44)	(55)
上に準ずるもの	17	0	45	20	4	0
以後各時代に見られるもの	10	7	16	3	0	0
上に準ずるもの	27	4	25	14	0	0

(注) 記紀歌謡のテキストは古典文学大系本。重出歌の処理も同集による。万葉集は岩波文庫本。作者及び時代の区分は前述沢鴻、森本博士の「作者別年代順万葉集」によった。枕詞の認定は、記紀歌謡は古典文学大系本、古事記伝、稗威言別により、万葉集の枕詞の抽出は、万葉集古義、武田祐吉博士「増訂万葉集全注釈」「朝日日本古典全書万葉集」「土屋文明氏「万葉集私注」「万葉集略解」を中心とし、他に「万葉代匠記」「冠辞考」等で補った。

古今集時代に至って新しく創作されたと考えられる枕詞は、読み人しらず時代に、あま衣——たみのの島・いれひもの——むすぶ・唐錦——たたまく、乱れ・くれ竹の——うきふし・さがにの——くも・しもとゆふ——かつらぎ・すがはらや——ふしみ・たぎつせの——はや・つのくにの——なには・なにはがた——うらむ・なにはなる——みつ・花がたみ——めならぶ・花すすき——ほ・まがねふく——きび・よどがはの——よどむの一五種類を数えることができる。六歌仙時代は、はつかりの——なきて

(黒主) 一種類にすぎないが、撰者時代には再び増加して次の一〇種類の枕詞が新しく創作されたものとしてあげられる。あまびこの——おと(小野春風)・せみののはの——衣(友則)——ひとへ(躬恒)・竹の子の——うきふし(躬恒)・夏衣——うすくや(友則)・冬草の——かれにし(躬恒)・まこもかる——よど(貫之)・水のあわの——消えで(友則)・山川の——おと(伊勢)・よしの川——よしや(躬恒) このように古今集中の枕詞のほぼ三分の一は新しく創作された枕詞であり、これは万葉三期四期よりはむしろ枕詞の創作が盛んであったことを示している。古今集に認められる枕詞は、このように伝統を受け継ぐと共に彼の人麻呂におけるような盛んな創造性を内に秘めていたものと解されるのである。

次に万葉四期までしばしば用いられ古今集に至って見られなくなった枕詞のうち主なものには、あかねさす、あまざかる、あをによし、うまさけを、大伴の、かもじもの、草枕、たまきはる、とりがなく、にほとりの、みなわた、もしきのなどがある。まず「あかねさす」は古今集ばかりでなく、平安時代に入ってから余り用いられなくなった枕詞であり、わずかに古今六帖・山田集にこの枕詞が認められるに過ぎなくなる。同様に「あまざかる」も古今六帖、俊恵法師集・長秋詠藻に認められるに過ぎず、「あをによし」は古今六帖・金葉以降の歌人、「大伴の」は賀茂保憲女集、新古今時代の歌人、「とりがなく」「にほとりの」は古今六帖以外には見出されなくなる。さらに「たまきはる」は新古今時代に至って復活するがもはや純粹に万葉集のままの枕詞としては用いられていない。「かもじもの」「みなわた」は平安時代以降は姿を消し、「もしきの」は一応伊勢、貫之、躬恒、古今六帖に枕詞としての用例が認められるが、もはや万

葉のように数多く用いられることはなく、「もししきに」「もししきを」「もししき」のように、枕詞としてよりも、大宮、宮の異名としての用法が盛んになる。これらの枕詞は万葉集と古今集以後とでは以上のように変化してしまったのである。

万葉集の主要な枕詞で古今集にその用例が認められなくなったものの中には、被枕詞なる地名を褒め称えた抽象的な称め詞としての枕詞「あをによし」「いもがきる」「うまさけを」「大伴の」「たくぶすま」「玉もかる」「とりがなく」「夏草の」「にほとりの」「まそ鏡」があるが平安時代の和歌が万葉と地理的基盤を異にする関係上当然消滅減退した。そしてこれに代るものとして同様の称め詞的枕詞「あま衣」「しもとゆふ」「すがはらや」「つのくにの」「なにはなる」「まがねふく」「まこもかる」「よど川の」「夕月夜」「よしの山」が新しく古今集に至って出現する。

以上のように万葉集で目をひいた代表的な枕詞の幾つかは平安時代の和歌に至って消滅した。代って新しく誕生した枕詞の語彙は「あま衣」「いれひもの」「唐錦」「しもとゆふ」「夏衣」など衣服に関するものから枕詞になったもの、「あまびこの」「くれ竹の」「ささがにの」「せみののはの」「竹の子の」「はつかりの」「花がたみ」「花すすき」など、日常生活にかかわりの深い語彙によるものであった。しかしながら「あしひきの」「いそのかみ」「玉ぼこの」「ちはやふる」「ぬば玉の」「久方の」などの語義不明瞭で古くから慣用されている枕詞は依然として古今集でも全用例数の三一%を占めているから、新しく創作された枕詞が存在する一方には、これら古い慣用的な枕詞が万葉の場合同様大きな比重を占めていることは勿論である。

万葉集で四九例認められる代表的な枕詞「草枕」が、平安時代にあつては枕詞としてあやふやな姿を呈するようになる。松田芳昭氏の「枕詞クサマクラの生成」（国語と国文学・昭和三十七年八月号）によると、万葉集中「旅」という語が現われるのは一〇四例、その中およそ半数の四八例が草枕と固着している。これに対し足引の・玉ぼこの場合はその四分の一が固着しているにすぎないことをあげ、早くから枕詞として定着した典型的なものといわれるが、代表的なこの万葉の枕詞は、古今集以後しばらくの間は枕詞として余り用いられなくなる。すなわち古今集には「旅」なる語が五例、「旅心地」「旅寝」が各一例あるが、「草枕」なる枕詞は一例も見出されない。わずかに躬恒集に一例、伊勢集に一例、貫之集に二例枕詞としての「草枕」が認められるにすぎないのである。そして逆に「あさなけにみべききみとしたのまねば思ひ立ちぬるく、さまくらなり」「古今・竈・三七六）のような異名（古典文学大系の佐伯梅友博士の注は、〇くさまくらなり―旅なりの意、とされる）、または草ノ枕の意を持つ例が亭子院御集に一例、伊勢集に三例、貫之集に二例と、枕詞の用例よりむしろ多くなっている。伊勢集の三四二番に「をのへゆきける人に」と詞書して「またかゝるたびしなければく、さまくら露けからんとおもはざりしを」と伊勢が贈った歌に対し、「草まくら露ばかりにやぬれにけむとまれるそではしほりし物を」（三四三）と返歌した両者の間には、枕詞の概念が持つ「旅」なる語意をお互いに詠歌の共通基盤として用い、しかも枕詞の用法にしていけない点で興味深い。

この外にも万葉集に数多く使われた枕詞の中「いさなとり」「うちひさす」「かみかぜの」「こもりくの」「やすみしし」なども、平安時代全般を

見渡してほとんど用いられなくなった。これらのうちの幾つかは金葉集の時代や新古今集の時代に再び息を吹き返しはするが、万葉集を見なれた眼から見れば、平安時代の和歌は、あしひきの・ちはやぶる・ぬば玉の・久方のばかりが眼に入り、これ以外の代表的な枕詞が既述の如くほとんど見出されなくなるので、この現象を以って枕詞の凋落・形骸化と従来見なして来たのであろう。しかし消滅した万葉の代表的枕詞に代って「唐衣」「玉くしげ」などは平安時代の方が数多く用いられるのであり、さらに古今集時代には数多くの比喩的枕詞が創作されていることが明らかなのであるから、私は枕詞が凋落したのではなく、詞句が交替し用法が変化したことを主張したい。このように平安時代の枕詞は、一方に「あしひきの」などの古い語義不明の枕詞が慣用され、万葉以来の和歌の伝統を受け継ぐと共に、他方では比喩的枕詞が多く創作され、それらの多くは淀みのうたかたの如く次ぎから次ぎへと創造され、また消えていったのである。そしてこれらの創作された枕詞の多くは、枕詞として独立し、被枕詞とだけ関連を持つのではなく、むしろ縁語の一部として歌全体の形成に積極的に参画し或る場合には縁語の中心語として一首の骨格・支柱としての役割すら枕詞は果している。そしてこのように枕詞を用いた歌の多くが理知的に構成された複雑な気分をかもしたし、もともと平安時代の典型的な歌となることが注目される。ここに平安時代に至って開拓された枕詞の新分野が認められるのである。

三

次に読み人しらず時代・六歌仙時代・撰者時代の順に、それぞれの時代

の枕詞の特徴について述べて行きたい。まず読み人しらず時代の枕詞であるが、既述の如く四六二首の短歌中六九の枕詞が使われ、ほぼ七首に一つの割合で枕詞が認められる。これは万葉集の第四期の場合とほぼ等しいのであるが、万葉集に用いられていた枕詞の全てがそのままこの時代に現われているとは言い難い。このことはこれまで縷々述べてきたところであるが、これを再説すると、

1 あかねさす・あまざかる・あをによし・いさなとり・うちひさす・うまさけを・大伴の・かみかぜの・かもじもの・こもりくの・たまきはる・とりがなく、にほとりの・みなのわたなどの枕詞は、この時代以後大體消滅した。特に草枕・もしきのが用いられなくなったことは大きな変化である。

2 これに代って読み人しらず時代の四九の枕詞中、一五種の初出の枕詞が認められる。

3 地名を褒め称える枕詞は、万葉四期と読み人しらず時代とは、被枕詞となる地名が変わったことにより当然変化がみられる。

4 読み人しらず時代の枕詞は、足ひきのを中心に、久方の・ちはやぶる・梓弓・唐衣・ぬば玉の六種類の枕詞で、全体の三分の一強が占められ、これ以外の用例数の少ない比喩的枕詞が大半を占める。

なお、「じもの」「なす」を下位の造語成分とする一連の古い枕詞群もこの時代以後姿を消した。これらの枕詞はもともと直喩に近い性格のもので一般に直喩形の枕詞はこの時代以後歓迎されなくなったことを示す現象と理解される。

読み人しらず歌に認められる枕詞で前項4の枕詞を除いたもののうち、

万葉集に認められるものは万葉の巻一〇にもっとも多く、その他七・一五・一六などの巻に見出されるものが多い。これはかつて安田喜代門氏が、万葉集と古今集との同歌・類歌を調査され(古今集時代の研究)、読み人しらず歌にもっとも関係の深いのは万葉集巻七・一〇・一一などの作者未詳の歌を集めた巻であるとされた結果と大体同じであり、古今集の読み人しらず歌がこれら万葉の作者未詳歌の後を継ぐものであるとする安田氏・小沢正夫博士の見解に沿った傾向に枕詞も合致することが知られる。このことは瀬古確博士が、古代における「芦垣」は忍ぶ恋の場の一つであり、「芦垣越し」の妻訪いが古代の忍ぶ恋の姿を表わし、枕詞「あしがきの」もこの性格を持った恋の詞であり、八代集に至って消滅したと説かれた(万葉集新論)が、読み人しらず歌の中には、「人しれぬおもひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしのなき」(古今・五〇六)と、万葉のこの用法が認められることから推測される。したがって読み人しらず歌の中のあるものは、むしろ万葉に近くいまだ八代集の世界とは別なものであったらしい。だが一方では古今集に至って出現した特徴的な枕詞の用法と思われる縁語の中心に枕詞が置かれる詠法が、すでにこの読み人しらず歌の中に四首認められ、万葉のままの歌の世界でないことが枕詞の点からもうかがわれる。

梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへふらば若菜つみてん(二二〇)

唐衣たつ日はきかじあさつゆのおきてしゆけげぬべき物を(三七五)

唐衣日もゆふぐれになる時は返す返すぞ人はこひしき(五一五)

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたの山におりはへてなく(九九五)

しかしながらこの四首に共通する特徴は、縁語の関係が単純でその及ぶ範

囲が歌の上の句か下の句のいずれかに限定され、決して一首全体には及んでいない点にある。したがって古今集中に認められる縁語の中心に枕詞が据えられる用法の完成はこの時代ではなく、撰者時代を待たなければならぬ訳であるが、この読み人しらず時代にすでにその萌芽が認められる。これらの現象を考えると読み人しらず歌は、まさしく万葉と古今の間に位置し、過渡的な性格を持つ歌群であり、枕詞に限ってみても、すでに古今風への新しい胎動が看取される。このことは続日本紀中の短歌にみられる「そらみつ大和の国はかみならしたふとくあるらしこのまひみれば」(国歌大観・歴史二三七)なる枕詞、続日本後紀中の長歌にみられる「あかねさすひねもすからに」「ぬば玉のさよとはすまで」(国歌大観・歴史二四六)なる枕詞が、ぬば玉を除きいかにも古めかしい万葉の枕詞であることから古今集の読み人しらず歌の枕詞が古人集的であり、新しい歌風への志向を示していることが言えるであろう。以上の事柄が察知できるのであるから、古今集の枕詞は決して化石化した形骸ではなく、古今風形成の一翼を担うものであったことが認められるものと思う。

六歌仙時代の枕詞は、一九八首の短歌中わずかに一一個、ほぼ二十首に一個の割合で枕詞が用いられているに過ぎない。撰者時代に至って再び万葉四期・読み人しらず時代と同じまでに数多く使われることから、この六歌仙時代は枕詞の低迷期と見なすことができよう。事実一一の枕詞の内容は、ちはやぶる・春がすみ・ぬば玉の・いそのかみなどの万葉の古い枕詞が大半を占め、この時代の創作と思われるものは、はつかりのがわずかに一例認められるにすぎず、枕詞の創造の面からみてもこの期の枕詞が低迷していた事情がうかがわれる。

枕詞の認められる歌は、屏風歌、詔応歌・歌合歌が各一首ある外は、すべて贈答など愛の歌で、これらの歌の中には「いそのかみ」と枕詞を用いたが、「ならのいそのかみでらにて郭公のなをよめる」(一四四・素性)と、實際石の上にて地名の縁で使したと思われる例や、「春がすみ」を枕詞として用いた三七〇番の紀利貞の「かへる山ありとはきけど春がすみたちわかれなほこひしかるべし」の詞書が「こしへまかりける人によみてつかはしける」とあるところから、おそらく時節は春で、霞が立ちこめていたであろうことが推測される。このように実景を利用した事情がはっきり知られるのは、恋四、七三五番の「思ひいでゝ恋しきときははつかりのなきてわたると人しるらめや」の歌の場合も同様で、上の句は小町の歌にも認められる類句に附した下の句は、「人をしのびにあひしりて、あひがたくありければ、その家のあたりをまかりありきけるをり、かりのなをきゝてよみてつかはしける」という詞書から、作者大伴黒主が實際初雁の声に触発されてこれを比喩的枕詞に用いた事情が察知できる。このように瞩目による枕詞の使用は、「色好みの家」で詠まれた「埋もれ木の人知れぬ」歌に見られる枕詞の注目すべき一性格であり、数少ないこの期の枕詞使用の中からわずかにうかがわれる特徴である。

次ぎに同様な特徴として以下の二首にうかがわれる現象も指摘される。

あまぐものよそにも人のなりゆくかさすがにめにはみゆるものから

七八四番、小野貞樹のこの歌の初句「あまぐもの」は、「よそ」の枕詞と見なされるが、下の句の「さすがにめにはみゆるものから」にも響いていると思われ、枕詞の影響は読み人しらず時代の部分的なものから一首全体に及ぶに至ったものと解される。同様の現象は次の、

秋の田のいねてふこともかけなくなにをうしとか人のかるらん

八〇三番の素性の歌についても言える。この歌の初句「秋の田の」も稲と去ねとを言いかけた枕詞と思われるが、結句の「かる」には「刈る」が枕詞と縁語の関係を結んでいるものと解される。このように、六歌仙時代に至って、枕詞が縁語の関係を持つ範囲が一首全体にまで及ぶようになった。一首全体の用語に影響力を持つこれらの枕詞は、縁語の中心語としての存在であり、一首全体の骨格を形作る働きをしているものと考えられる。

以上の如く枕詞は縁語の中心語として、または瞩目の枕詞として新しい分野の開拓が試みられたことから、六歌仙時代は後述の如く、他の修辭面でも、懸詞・縁語に新傾向がうかがわれ、いわゆる古今風が形成されてゆく傾向と流れを等しくしていることが認められる。このように枕詞は古今風の形成と決して無縁ではなかったのである。

四

撰者時代の枕詞は、四四六首の歌数中に六六個認められ、万葉四期、読み人しらず時代同様ほぼ七首に一個の割合で枕詞が見出されるようになったことを示している。この六六個の枕詞の中には既述の如く一〇種類の新しく創作されたと思われるものが躬恒、友則の歌を中心に認められる。六六個の枕詞を作者別に分類してみると、貫之がもっとも多く一六、次いで躬恒、友則がそれぞれ一〇、伊勢、元方、敏行がそれぞれ三となる。この結果撰者時代の枕詞は、貫之・躬恒・友則らの撰者によって半数以上が占められていることが明らかとなった。この辺りの事情は、すでに触れた如く万葉集中の枕詞の大半が幾人かの有力歌人の使用によって占められてい

た事情と似ている。そこで貫之、躬恒・友則に伊勢を加えた四人の歌人に、ついて私家集などを参考にして、枕詞使用の態度・意識をうかがうことにしたい。

貫之が使用した枕詞は、古今集仮名序、長歌のものを除くと、現在知られるものは一〇七例である。このうち屏風歌、歌会歌合歌などいわゆる晴の歌に見出される枕詞が六三、萩谷朴氏校注の日本古典全書「土佐日記」所収の貫之全歌集によると、これに該当する歌は全部で六二四首あると思われるので、枕詞の使用率は一〇・二であることが求められる。これに対して褰の歌は枕詞三七、歌数三八一、使用率九・七であり、ほとんど両者には相違が見られない。しかし個々の枕詞の内容に着目すると、そこには顕著な相違点が幾つか見出される。褰の歌に見られる三七例の枕詞とは、足引の、石の上、玉ぼこのがそれぞれ四例、玉の緒のが二例ある外は、すべて一例だけの種類の異ったもので構成されている。一方六三個の晴の歌の枕詞は、足引のが二三例、久方のが九例、玉ぼこのが六例、ぬば玉のが五例、千早振が四例、あら玉の、唐衣がそれぞれ三例と、ほぼこの七種類の枕詞で八割以上が占められている点が注目される。このように晴に用いられる枕詞は、特定の種類にほぼ限定されている。晴の歌をさらに詞によって分類してみると、屏風歌五四五首中六〇例の枕詞（一一・〇％）が見出されるが、歌会歌合の歌三八首中には枕詞は一例も認められず、従駕詔応歌二〇首中に枕詞二となることが知られる。この結果晴の歌の枕詞とは屏風歌の枕詞であったことが判明する。当時の歌合歌は、新古今時代の場合と異なり枕詞はほとんど用いられなかった。萩谷朴氏の「平安朝歌合大成」によって、天慶年間までに四一回の歌合が知られるが、そのうち

枕詞が認められる歌合は一五回にすぎず、あしひきの、ちはやぶるをそれぞれ三例用いた「本院左大臣時平前裁合」「京極御息所褰子歌合」などが最高で、ほとんどが一例枕詞の認められる歌合にすぎない。四一回の歌合中の総歌数は一〇二五首、その中枕詞は二六、使用率はわずかに二・二％であって、このことから貫之に限らずこの期の歌合にはほとんど枕詞が用いられていなかったことが知られる。勿論このような場合の枕詞は、古くから慣用化している、あしひきの・ちはやぶる・ぬば玉の、久方のの類であり、以上の傾向からして、貫之が歌合中に枕詞を用いなかったことは当時の趨勢の中にあることを示しているものと解してよいであろう。

褰の歌の枕詞は、貫之集の部立によって分類すると、恋歌一五二首中に枕詞一四、九・二％、別歌四六首中に枕詞七、一五・二％、哀傷歌二五首中枕詞四、一六・〇％雑歌一五〇首中枕詞一二、八・〇％なる結果を得る。この中別歌には、玉ぼこの、草枕など離別の場で頻用される枕詞が目につき、哀傷歌では、素性法師の死去を追悼し、故人の住持していたといわれる石上寺に因んで「いそのかみ」なる枕詞を使用した歌二首がある関係で使用率は高くなっているが、おおよそ八％前後であり、部立による差異は晴の歌の場合と異なり認められないことが知られる。しかし褰の歌の枕詞には、晴の歌には見られない次の特徴が認められる。その第一は、六歌仙時代に見出された瞩目による詠法で、詠歌の場所で見出された景物を实景描写か枕詞としての用法か判別の難しいような巧みな使用である。

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな

は、詞書に「山寺に行く道によめる」とあり、置くと晩稲がかけられているので、確実に枕詞の用法であるが、おそらく秋、貫之が朝露・晩稲を見

ての歌であつただろうと想像される。

別れても今日よりのちは玉櫛笥明け暮れ見べきかたみなりけり

この場合も詞書に「師尹の頭の中將、東へ下る女に、櫛の笥・鏡など調じてやり給ふに添ふとて」とあつて、同じく囑目によることが明瞭である。このような用例は、屏風歌の中からは余り見出されない。わずかに

梓弓春の山べに在る時はかざしにのみぞ花は散りける

が、月次の屏風歌に認められるにすぎない。この歌の題は「弓の結」で、絵に弓が描かれているものと推測される。足引の・久方のなどの慣用的枕詞がほとんどである屏風歌にあつては、これは当然のことであろう。このことからもうかがわれるように、屏風歌中の枕詞は、屏風絵に描かれている山・空（大部分は歌の主題）を強調する為に形式的に置かれたものであつて、枕詞を縁語の中心にすえる

ふりぬとていたくなわびそ春雨のたゞにやむべきものならなくに

の春雨の如き用法は、もっぱら襲の歌のものであつたことが明らかとなる（屏風歌では「冬草の枯れも果てなでしかすがに今としなればかりにのみ来る」が一例のみそれかと思われる）。第二に襲の歌に用いられている枕詞についての特徴は、それが初句に置かれた場合、序詞の最初に冠せられ序詞の一部に繰り込まれて用いられているという点である。

沖つ波高師の浜の浜松の名にこそ君を待ちわたりつれ

いきしまの 大和にはあらぬ唐衣ころもへずして逢ふよしもがな

まこもかる 淀の沢水雨降ればつねよりことにまさるわが恋

石の上布留の長道なかなに見ずは恋しと思はましやは

の点を附した枕詞がそれである。しかもこれらの序詞は、いずれも万葉

以来しばしば慣用されてきた類句的なものである。上野理氏は「襲の歌はだれもかもが作る歌である。恋をするすべてのものが歌を詠み、歌を理解したのは、口語と歌語との相違が少なく、雅語を修練する必要がなかったからであろうが、恋の贈答に使用する襲の歌に類型があり、類句を類型に合わせてつなぎあわせることで和歌を作ることができたからであろう」（『平安朝和歌史における襲と晴』文学四十二年一月）と述べられ、貫之らも襲の歌の類歌を使用し、類型を創造し新しいものに変化させたと説かれたが、万葉以来の類型が古今集時代にも生きつづけ、貫之は枕詞の面でも、これら類型と創造の二面の努力を払っていたことがうかがい知られる。

貫之は家集に認められる数多くの晴の歌を、古今集には三首入集したのみで、他の入集歌はいずれも襲の歌からであつた。彼の古今集入集歌一〇二首中には一六個の枕詞が認められるが、この使用率一五・六は全歌集中の襲の歌の場合の九・七の比率と較べていかにも高い。撰者である貫之は自己の作のうち、むしろ枕詞を用いた歌の中に得意なものが多かったことをこの数値は示しているのではなからうか。とすると、貫之は枕詞についても巧智的な生きた使用を志し、積極的に活用しようとしたものと思われる。彼にとって枕詞は決して無用の長物でも二義的慣用語でもなかったものと想像される。

躬恒の枕詞は、私家集・勅撰集などによって集計すると四七例知られる。これらの枕詞の性格は貫之の場合とよく似て、屏風歌（枕詞一〇例）、賀歌（一例）・詔応歌（三例）に見出されるものは、いずれも固定的観念的な種類が多く、歌合には枕詞が認められず、逆に襲の歌には個性的な枕詞の使用例が目につく、特に躬恒の場合は、縁語の中心に据えられた枕詞

が多く、褒の歌の三三例の枕詞の中少なくとも八例はそれと思われる。躬恒はまた久方のなる枕詞を好んで、四四例中七例もこの枕詞を用いている。これはいかにも彼の歌風を彷彿せしめる。また躬恒は、「よし、川よしや人こそつらからめ」の如く、当時としては珍らしい同音反復の枕詞を用いている。このように躬恒の枕詞は貫之と比べて、多種多様にわたり新しいものが多い。既述の如く初見のものも多く、いずれもそれが古今集に入集している事情から、撰者躬恒の枕詞使用における自信の程もうかがわれる。

友則は撰者の中で「他の人々よりもやゝ目立つように思われる。かれの歌は、たと数が多いばかりでなく、四季と恋とにわたって形式的にも複雑であり、しかも、撰者たちの歌としては抒情味に富んでいる」（古今集の世界）とは、小沢正夫博士の友則評であり、流麗典雅な調べのよさは藤岡作太郎博士以来しばしば指摘される。かような詠風の彼は、枕詞の面でもまた貫之、躬恒に比べて数々の特色を持っている。平井卓郎博士の整理された友則の全歌数は八八首であるが、この中に枕詞が一五例見出され、使用率は一七〇と貫之らの二倍近い数値を示している。一般に歌合の場合には枕詞が用いられることがきわめて少ないが、その中であつて友則は四例（八首中）の枕詞を用いている。貫之躬恒が枕詞の大半を足引の、久方などの慣用的な古い枕詞に費やした中であつて、友則にはそうした様子がなく、比喩的枕詞が用例数においても大半を占めている。一五例の枕詞中半数近い七例は新しく創作または工夫されたものによつてゐる。勿論縁語の中心に置かれた枕詞、詠歌のある景物を囑目して実景描写か枕詞かが判然としない例も認められる。以上の特色からうかがうと彼の用いた枕

詞は、懸詞によつて被枕詞に接続し、軽快洒脱なリズムをかもし出すものであり、一首全体の文意と関係を持つ点でも古今集の典型的な枕詞の使用法と考えられてきた枕詞の姿と合致する。個性的で比喩的枕詞がその大半を占めるという点では貫之・躬恒よりもむしろ友則にこそ古今風の枕詞の徹底した使用の態度を認めることができる。従来古今集撰者時代の歌風を端的に示す者は貫之・躬恒ではなく友則であり、歌数以上に彼が目立つ存在であるとは衆目の認めるところであるが、このように言われる原因の中にはこうした枕詞の新しさと、それを生みだした詠歌態度があつたものと思われる。

小町・馬内侍・小大君・和泉式部など、わずかの女流歌人を除いて、概して平安時代の女流歌人は枕詞を使用することが極端に少ない。そうした中であつて古今集の歌人伊勢の場合には、枕詞の使用数三二、疑問のあるものがさらに一二例あり、確実な枕詞だけで使用率を求めても六・四となり、女流歌人の間では際立って高い。伊勢がこのように多くの枕詞を用いたことと関係があると思われるのは、彼女の枕詞の六七％が全く新しい独創的なものであるという点である。関根慶子博士・村上治・小松登美氏共著の「校注伊勢集」の注は、こうした枕詞の幾つかに対して「『よよ』を出すための序詞、世に竹のよをかけたもの」のように注し、序詞と扱つておられるが、既述の枕詞の定義によれば、これらを枕詞として扱つてもよいと思われる。とすればこのような独創的な枕詞の使用態度は、友則の場合をむしろ数段上廻つていえると言えよう。さらに伊勢の情調の繊細さ調べの洗練されていることは多くの人々によつて説かれてきたが、序詞・枕詞・縁語・懸詞・譬喩などの修辞に巧みな特色も、かつて保坂都氏が「国文

学」誌上（昭和三年五月号）で言及されたところである。この中にあって特に枕詞に独創性が顕著なことが指摘できる。彼女の枕詞は二例（屏風歌、歌合歌）を除いてすべて襲の歌に認められ、特に瞩目による場合が大半を占める。相手の歌を辛辣に皮肉り、当意即妙に逆手を取り、技巧を凝らして応酬する男女の贈答歌は、常に瞩目の景物を巧みに詠み込み、景情調和の縹渺たる情調をかもし出してゆく。こうした中であって、瞩目による景物を用いて声調を整えながら歌趣に参劃してゆく彼女の枕詞の使用は、古今集的なものともすぐれたものと認めてよいであろう。以上四人の歌人を通してうかがった撰者時代の枕詞は、貫之の技巧、躬恒の巧智、友則の抒情、伊勢の独創とそれぞれ歌風の特徴を示し、縁語の中心語・瞩目の枕詞などの特徴的な用法によって積極的に古今風を形成していったものと解される。

古今集の長歌には、五首中に枕詞が一九例見出される。長歌自体は心情が涸渇し、形骸に墮し、リズムにも分裂が生じ、崩壊期の姿を呈するものと思われるが、枕詞だけを見ると万葉に匹敵する状態で盛んに使用されていると言える。しかもその枕詞は、古今集時代の短歌に認められる特徴的なものが一三例を占め、被枕詞との接続も五首共工夫が凝らされ、唯単に伝統に固執するのではなく、相応に独創性が認められる。枕詞から見れば、彼等の詠じた長歌は、人麻呂、赤人の伝統を継ぐ自負と古今集の技巧がめぐらされた所産と言える。ただしこの工夫と自信が成功を収め得なかった事情として、五音句が独立句の態で次の七音句のみの修飾格として働き、端正な五七調を保たねば分裂しがちな長歌という歌体の制約による結果と

思われる。貫之は仮名序において枕詞を用いて技巧を凝らした。例歌を除く本文中に、枕詞ないしは七音一句の枕詞的な句を一九例用い、大部分は「あ、い、ね、の、地、に、し、て、は、素、盡、鳴、尊、よ、り、ぞ、起、り、け、る。ち、は、や、ぶ、る、神、代、に、は、歌、の、文、字、を、定、ま、ら、ず」と対句形式で用いている。ここにも技巧を凝らす撰者の姿勢がうかがい取られる。このことからしても、枕詞は古今集が重んじた修辭の中であって、一般に考えられている以上に重要視されていた修辭であったことが知られるのである。

五

小沢正夫博士は「古今集の世界」（塙選書、昭和三十六年）で、古今調の成立過程を、序詞・擬人・見立て・縁語・懸詞の変遷を通して、古今集の歌自体の中から詳細に調査論及された。しかし何ゆえか枕詞は一項立てられず、さして論及されていない。博士は「序詞は古今集時代には衰え始めた修辭だといわれるが、六歌仙時代に減少し、撰者時代にまたふえている」との結果を中核に、擬人は読み人しらず時代の自然愛の反映によるものが、六歌仙、撰者時代と見立てを好む趣向歌が殖える傾向を辿り、縁語、懸詞も単純な読み人しらず時代のものが、六歌仙時代になると発達し、撰者時代にはますます複雑なものとなることから、「私はこの事実を六歌仙時代には序詞のような古い修辭技法が顧みられず、縁語・懸け詞・見立てのような新しい修辭に関心がもたれ、これに反して撰者時代には古い修辭が復活し縁語・懸け詞・見立てなどのいわゆる古今的技法とが総合融和されたのであると解釈したい」との見解を示された。この見解はこれ迄述べてきた如く枕詞についても当て嵌まる。瞩目による古今的な枕詞の場合に

は、従来説かれてきた序詞の個性的な表現と性格が一致するのであり、一方この時代の序詞には伝統的な類型表現が存するのであるから、序詞と枕詞の間には本質的な違いは認めがたく、音数による便宜的な区分が存在するだけのように思われる。序詞と枕詞の性格がこれ程迄に接近するのは、万葉には見られずこの時代以後の特徴となるのである。そしてこの傾向は貫之・躬恒よりむしろ友則、伊勢の枕詞に著しい。

古今集の典型的な枕詞とは、枕詞が情景描写か分明でない囑目の枕詞であり、縁語の中心として歌全体の文意に情調を添え、懸詞として軽快洒脱なリズムをかもし出す用法に求められる。これらの枕詞は、しかしながらいずれも褻の歌に用いられていて、屏風歌などの晴の歌の中からは見出し得ない。晴の歌の枕詞は慣用的な古式のもが主で形式的でいかにも固苦しい。枕詞の技法面からうかがうと、枕詞を使いこなして生かしているかどうかの点で、古今集時代の歌の中心は、撰者の意識とは別に「色好みの家に埋れ木の人知れぬ」褻の歌にあり、晴の歌はまだまだ成熟しない青い果実にすぎなかったと推測される。これら褻の歌の中にこそ枕詞の修辭的生命は脈々と生きつづけ、殊に撰者時代は一時衰退した枕詞が万葉に匹敵するまでに息吹きを吹き返していた。したがって、「褻の歌の持つ古代的で類型的な、色好の世界の、みやびの美とモラルと形式とが、個性的で内省的で現実的になった人々の心に不満なものとなり、散文を流行させたのである。また、いままで褻の歌の重要な一面であった、即興詩的、謡い物的分野が、あらたに流行した連歌・今様という形式やジャンルに浸食され、褻の歌はすっかり衰弱していた」（上野理氏、前掲論文）。拾遺集以後になると、枕詞に危機が訪れ、枕詞自体が大きく変わらざるを得なくなるのである。